



利  
1534  
卷 7



鹿山集秋中目錄

鷓鴣	鷓鴣	鷓鴣	鷓鴣	鷓鴣	鷓鴣	鷓鴣	鷓鴣
鷓鴣	鷓鴣	鷓鴣	鷓鴣	鷓鴣	鷓鴣	鷓鴣	鷓鴣
鷓鴣	鷓鴣	鷓鴣	鷓鴣	鷓鴣	鷓鴣	鷓鴣	鷓鴣
鷓鴣	鷓鴣	鷓鴣	鷓鴣	鷓鴣	鷓鴣	鷓鴣	鷓鴣

司印

放生舎

駒込

任者市

鹿山卷中九

鷄

秋部

母を何ちくくといくと啼鷄

野をうさつ木迷懐くといと啼鷄

尾の久母都くもあふりたり

尾としんいんといとちふく鷄

秋乃秋をくといとけらる鷄

西多喜い実中け地のうく

るけを鳴きまゝの入り乃鶉

あり初とむけの鶉も尾長

よ多初とむけの鶉も尾長

くう鶉の鶉花ゆさむる鶉

床座とれ建あうさむる鶉

庭外くさむりやさむる鶉

うさむの祖父もさむる鶉

中一風やじと啼中風やめし鶉

聖徳太子

法政

小松

時之

之直

月

宗暉

孝庸

我と深くさむるや夜たし鶉

うさむの夜さむるもさむる鶉

南の野ゆきと啼や鶉也

本此道の宿と

若とさむくひけ鶉目の秋枝

一とさむくひけ鶉目の秋枝

引きつた秋の葉さむる鶉尾

秋乃目や物場中鶉うさむ尾

邦山

了安寺

名古

成方  
夕露  
人身

若川

玄樞

玄以丸

月

月

さきつらりたる鶺鴒や救の  
うけくやくも深き此の  
海

日月

鶺鴒

さきつらりたる人の看る如  
りつらりたる鶺鴒の如  
きつらりたる人の看る如  
りつらりたる鶺鴒の如  
きつらりたる人の看る如  
りつらりたる鶺鴒の如

鶺鴒

田の名は鶺鴒さきつらりたる

良和

都名と鶺鴒さきつらりたる

是也

松坂

鶺鴒乃鳥の流何と百と鶺鴒

加任

さきつらりたる鶺鴒さきつらりたる

名

看經さきつらりたる鶺鴒さきつらりたる

本我

名

看經の志すの具沙のつらりたる

貞利

さきつらりたる鶺鴒さきつらりたる

梅藏

鶺鴒

鶺鴒

都一と居るといふあへりし中の勢

野の目とぬらむはくはくもあはれ

ぬらむはく野の草とくも目流は

野とくしとく流るるはくおそり

ひ移るといふ合せく接ふふあは

又字あはれ野もあはれいのか勢

野の吹くはくはくはくはくはく

まじりてはくはくはくはくはく

あはれはくはくはくはくはくはく

野を林のまはれあはれはくはく

野の吹くはくはくはくはくはく

夕霧あはれはくはくはくはくはく

月のあはれはくはくはくはくはく

かりまはれはくはくはくはくはく

あはれはくはくはくはくはくはく

あはれはくはくはくはくはくはく

あはれ

あはれ

あはれ

あはれ

あはれ

あはれ

あはれ

あはれ

あはれ

あはれ

あはれ

あはれ

あはれ

あはれ

くらかんの中みくらも番はる  
 くら歌を其まう唐れもひ字非  
 かりもひみ道乃法くひ抄  
 るまの祿の趣れもかんと唐れ札  
 唐れかりも白一もまかに酒  
 くら唐れ歌すくらみりゆにに  
 どのひも皮肉骨あつ唐れを非  
 子筆とく毛とあらふ唐れ虎

教抄りくくら鷹金や子字受  
 あらまひれい抄も同封字天津  
 りんかりとともひまてくら月抄唐  
 唐れく歌もまひる字をれもまら  
 唐れくらもまひるもま唐れなん  
 新字の粘の唐れくら天津鷹  
 字やらまうとと計の抄りも  
 何れもまひるくらなんくらら

西純  
 田美くら歌

徳本りり漢とさう海

江守年六為  
之念

人るわくりも持ふ田圃

古田  
友直

かうのふれしけくや為の五

季英

百美あわしたかりり子さ北の

良和

下河原めく

かり縁やまこ秋死ふ下河原

大坂  
安

うみりりと整り了そを鶴島

橋山  
之直

かき鶴は鶴ゆく為や鶴の嶺

保本

白鳥のたじ着やう此深鳥

三島  
之晴

子観るのさなく白鷹やかしり

伊原  
正實

誰と目とかけ地とるそと為さ糸

富  
元法

天津鴈給流めさうわ積貫の

伊原  
季英

野ら老のそこま為字北右浦の

伊原  
正實

為字ら流るそもや月の物玉篇

井上聖為  
正知

矢ていさうゆと字とつらんそ

大森  
之与

板本めも似るかりの為字

左右  
貞好



新くそふのりふのりふのりふ

新式

のりふのりふのりふのりふ

之与

のりふのりふのりふのりふ

一身

のりふのりふのりふのりふ

百屋

のりふのりふのりふのりふ

任准

のりふのりふのりふのりふ

後秀

のりふのりふのりふのりふ

幸以

のりふのりふのりふのりふ

原耳

のりふのりふのりふのりふ

如貞

のりふのりふのりふのりふ

如純

のりふのりふのりふのりふ

幸忠

のりふのりふのりふのりふ

三由

のりふのりふのりふのりふ

幸勝

のりふのりふのりふのりふ

如延

のりふのりふのりふのりふ

如次

のりふのりふのりふのりふ

如權

白雲白鳥天正もろや天正鷹

純別鞋  
三白

月母鷹の敷百それ必そり外

雙色  
袷

龍鷹とそえぬやぶ斗の星月

袷  
白紙

この月の新ゆかりもそりさか

袷  
每延

八羽かいたたのむれり乃汁

黒  
白紙

鷹を鷹もろひつ汁の新製

紅唐紙  
定房

つるめりとりり液り搦御水

大話  
五色

射り矢さそをろ鷹をろ下りあ

長倉

のりこの利是の流ぬお草介

小森  
素忠

鷹金やるさこもは北ゆり

純別鞋  
赤紙

ろりの此あふるれやまま林

尾川法用折  
赤紙

鷹金の枯風樂のあしちり如

長乾丸

まかいらる流ぬもろのん如

同

ろり流ぬと敷流ぶるれろり

同

枯らぬるまやあむれ天正鷹

同

と砂流ぬるまろまの流素介

同

月の初とひける月似るる字  
較るるうらわいさね鷹字外 同 月

わらわゆく物所の振まひ  
かたかひくありてけい  
らぬとまうまはPをよし

月のけいよきま流るる未祭  
東と西多美ま層まうそ 同

御門次はわらまの時

万全を三ぬかたわ地美の 日

秋燕

やまのあまうんほまきまじんも燕 連書 一歩

物まきのてまひこくまつて物 長凡

色鳥

花の結まらそじらわ軍中法  
ふくの翅やめ八の軍中か

核原めわつる押まら目白外

をいふところへ此巻を四十四

四十四のうきもまじりぬる

をのうき目りうきも酒

色鳥もすじ夕顔乃小家

山うらうらう家此きり

鳩の枝とれじ時分の四

軍のうきも入しや

軍のうきも入しや

ひらう軍のうきも

五十四のうきも

夏はい基志わうせ

色鳥のうきも

翻書と出入は

まじりぬる

終りぬる

貞宜

舎嘉

知是

本如

此

月

月

月

津

如

信

政

未得

同

貞則

兼天下金

つくしあえ候へともをさけ  
日

枯鷲

居るうまははくふてのふの小鷲  
わらふまはくふてのふの小鷲  
殺生とまらひはくふてのふの小鷲  
目のさらきとまらひはくふてのふの小鷲  
鳥とまらひはくふてのふの小鷲  
はくふてのふの小鷲  
一治

松林居士

藤野

平と給ふるふと人揚家小鷲  
成言

那

枕山

保友

小鷲とわすらひはくふてのふの小鷲  
心を

森谷

とや鷲やはくふてのふの小鷲  
毒

鷲はくふてのふの小鷲  
長蛇

枯蝶

わらふまはくふてのふの小鷲  
枯蝶のふてのふの小鷲  
長蛇

啼虫のしるる露はちるる  
 空を夜や寝るふりし心  
 草木のわさび枯に虫らひ  
 目と心の秋とくもるけ  
 蜘蛛の居るる多し虫ら  
 り道ちりしれ葉やなる  
 望むるもあはれ寝る所

望横より伝織をぬく  
 う細い糸の着や涼さ  
 竹の葉のや小葉の響け  
 しのびと涼くあはれ  
 野鳥の響け  
 秋のくさくさ  
 久下地へ川さそわく  
 響わぬも道理を風を

道わたり海虫はのちあつらん  
 三層の舟着はむきあがり雲虫  
 とも虫や小萩つりよの舟身よ  
 振く空の驛海舟鈴の響中  
 のかありや水路りかみ林の虫  
 松虫の好き色は人むく子目外  
 土んが着とるくやな中虫は夢  
 節の舟はとも虫は鈴や花は蕾

池子  
 如負  
 赤心  
 季吟

秋虫はよふかさうてけし外  
 鈴虫のそふら響は時為外  
 虫鈴もや露ちくひつらん  
 蝶去虫名らう一垣をまつとくと  
 蝶去虫への宿のりや 蝶  
 蝶去虫よとひりて啼やまらなく  
 三りくとも此鈴のちへさあ蝶去虫

中吟 貞直  
 紅粉 定房  
 大坂 舎成  
 那山 正武  
 大坂 成方  
 京 法成  
 那山 良知  
 遠川

秋晴や四季とまのれにまのれ  
水差のわづらひけのまやまの虫  
秋のほろき命毛さるれまの虫  
ありんかやまのれ人形まの虫  
のあはれをまのれくまの虫  
わり込へてまのれまの虫  
鞠のまのれまのれまの虫  
まのれまのれまのれまの虫

海方無名

政成

伊勢

正賀

河津

瑞宝

野宮

祐政

鳥居

長昌

巻玉

大昌

中島

直吉

春卜

傾城のまのれまのれまの虫  
まのれまのれまのれまの虫  
まのれまのれまのれまの虫  
からんまのれまのれまの虫  
響虫鳴野のまのれまの虫  
しままのれまのれまの虫  
ひままのれまのれまの虫  
野まのれまのれまの虫

枕山

保友

水谷

貞則

尾形

宗孝

左時中

若忠

次良

羽山

を川

貞友



約し人虫を志すのやうに虫

壽

古乃

泥をくしきう好ふ鳴や響

染

不存

秋やうき髪より虫を吹く

高

光年

髪より母を呼ぶ針のいぶき

虫

位元

餅がそくく長き敷か啼いそが

奥

友三

まこと色わくく秋のくれも非

留

政位

お白比皆冠じらけの花

虫はくく葉の息をけ花は非

勝録

秋の野に春乃秋や虫盡

何れ

但英

秋草母と秋蝶の葉へ虫盡

去各川

舎主

かき虫といふ字やらうは志

新川

玄摠

秋葉うじ色ゆふ露をけけさ

云余

一入

虫より命をりきりさよの露

一系

友我

秋より一角はさ幾今をわらひ

虫は丸

月夜といふさあかしのきりけ

月

露柱や元をかんまはきりけ

月

打してちりまきふきて啼ひはかり  
 泣くまをこゝろどりの啼やこれ  
 松虫のふりり落るとや露の玉  
 垂りとも代つらんとも折の  
 秋虫のこゝろや時をこれらん  
 けい虫のまゝ一對のさうれ  
 びり此秋もまゝらぬか  
 楓のこゝろ虫多しと秋  
 秋

秋の鳴る花軍のつらさ  
 響出小まてとやいふ  
 ちりまの啼やじつと  
 虫はまの教りるれや  
 虫とのまは結なま  
 秋の鳴る花軍のつらさ  
 響出小まてとやいふ  
 ちりまの啼やじつと  
 虫はまの教りるれや  
 虫とのまは結なま

秋を乃理きくふんをこらふ  
秋啼せしむふあは虫舞  
秋乃野ともふしこく虫舞  
ひつこくひく落草花たうこ  
凍鼓にけ虫吹おそ人出代の  
こ 　　こ 　　こ 　　こ 　　こ

麻

あゝそんやういらうと啼麻は妙  
をそそて摘脚や麻をうら

秋也の嶽あゝ十くらうん  
あゝ物也十くらうん深まのあ  
啼麻と書あうそこの本漢  
肉裏めをせりあうあつるあ  
麻也秋書あゝひく男啼  
去日野くつるあゝとまん女麻  
麻の皮やうもあお白あ  
麻乃毛此星も射る矢の目痛

麻の毛比糸より時を速く  
わりの麻いふるわりのや麻は  
交らん女を汝母志の比  
かいらうれ子のあつたこと  
節ふらち女又珠の智直  
苗みらち麻のわいこれち  
素とふ志の横節流の  
比叡山と

子川 一舟  
正新  
正知  
一治  
貞直  
長治

弟さふい初嬢いんの  
女麻より勢よりたふよ  
越るの馬の勢もるや村の  
いとわをれ啼や流山の  
山坂も麻の為母はく地  
あつた谷とれを後寛信部  
麻と女やわい初嬢  
本も小麻より比叡山

安助  
時之  
芳昌  
定利  
貞直  
生宅  
信之  
宗純

奥山子知葉也たつと子負麻

松 一治

火とさむらひ葉の麻也さる皮

乃川 玄樞

麻也ぬくぬりからやあさば

正成

小男麻也すの押子くは麻の

未得

し麻を子とゆふや田圃へらるの

麻 木部

田のさいわあく此角うらや追はは

中 三徳

とびくもくんとけわらほのそり

葉 貞貞

しく田りわわると小麻のほは

長昌

蜂のさく角わらりてわあ

有村 右行

みのあとののあいのあを葉せん

松 玄樞

尖母わらふ麻ハかまをらわら

松 友美

あくの道ありまじしぬら

松 元辰

う校母すうらゆわら

松 貞純

うあらしを葉の葉があいの葉

長長

山を麻風強と増今を麻此

日

うららとれ再が葉とわあいの葉

日

りしめれを麻ハ春ハ此種  
麻を色はしり粉をさらるる麻  
かげも麻あつとくは皮と麻のむ  
いふを八幡の式部  
くをいひしり麻のむ  
系紙の白也とす  
丸し人乃造られり  
八幡のつとあり麻の花

の池と名入  
き抄云  
らひ母希く田おくらり  
ひことたをり麻の中より麻の  
あつことちつとにららあつ  
物人のいふといふのたを  
むきしり麻と造る麻  
はのめらるる色すく

秋田

田中宮此討たり年

天王のおも、おそれぬ田中宮  
かづねらひあくのわらひれ山田  
秋の国を八斗んがと、いれさるる  
あさむかひ月よさふと、かり田  
突もつそ、あつのはらぬ、あつ  
川編を度のがま、れ此調へ

山田より信初や麻のむら  
籠書れ、あつち、あつち、あつち  
あつち、あつち、あつち、あつち  
あつち、あつち、あつち、あつち  
あつち、あつち、あつち、あつち  
あつち、あつち、あつち、あつち  
あつち、あつち、あつち、あつち  
あつち、あつち、あつち、あつち

乙丑

貞利  
貞利  
貞利

林の田ハ稲葉とるるゆき  
徳山 保友  
 焼田とるる焼小出解るる信 政信  
 百姓ハ田法杉山 成方  
 かせさ了安寺 成方  
 新了安寺 成方  
 知地了安寺 成方  
 種と多て了安寺 成方  
 ちち了安寺 成方

稲造廻り中修 貞直  
 稲の中大坂 貞直  
 田大坂 貞直  
 赤鞍貫 貞直  
 出大坂 貞直  
 金剛山了安寺 貞直  
 美了安寺 貞直  
 い了安寺 貞直



比の如く縮の土の美薩哉

右各

名好

つさ来たやそくさう并哉

平尾并

道知

小田とち教信都や為比並哉

女并

多則

流田とち信都をぬり并哉

妻取

易延

映縮田とりりいそ實信都并

女并

か友

空活山田信都の葉の湯坊並

女并

易念

秋とち田信都やとぬ括地並

女并

安助

娘果田ぬんてんもぬと信都并

女并

貞則

赤の流く信都の田面とち比

春

貞昌

山田りぬ信都乃教珠の為比並

娘孫信都并

貞次

物いそそ身ら山田ハと信都并

女并

貞次

信都あうてちぬ山田ハと信都并

女并

貞次

秋の田比がさる母まふ信都并

女并

貞次

本分比田比とまりり信都并

女并

貞次

いるるすふふん山田の信都并

女并

貞次

小山田のちと比とぬ信都并

女并

貞次

「田まりの信都のせまのつら  
うまの町くまのやまの  
まをうまのまの田の東北肉

誓

手天よりうまのまのまの  
誓はくまのせまのまのくま  
まの野まの誓はくまの  
まのまのまのまのまの

誓はくまのまのまのまの  
まのまのまのまのまの  
小男まのまのまのまの  
人まのまのまのまのまの  
まのまのまのまのまの  
まのまのまのまのまの  
大海まのまのまのまの

とい沖比を渡りおきや寄の海  
かまらくわ海くくくくくく

長

大坂

う浪寄や首れ糸の川跡

乃

まのらくと木の指やまんと暮

一

る蹄と号せり双とん

右

さんせきり馬蹄もその寄れ海

左

追

沖のふつ死別の神れ暮れ海

左田

友

傘のちく浪やまんと暮の面

永昌

舟

風袋よりとつと寄や流り元

水

水

物書ハ暮のくくくくく

長

持衣

のくちや者ものくくく

笠もこれ持揺く持さわ

持時の小籠もまわく

たつめが家うちての小櫃か  
石の巻く甚う川と礎外  
町まけくまや砦の志うお  
東宮の砦う川移も妙ひえ  
いりちくう川をこまに家外  
あやせく流もうのや水家  
いんふうてら砦の上よりか  
天の御衣の子影方歳乃砦外

井上

正徳

任田

政信

高岩

心丸

三所

宗時

國府寺

政次

北山

盛成

坂本

保友

井上

政辰

正徳

八葉も穂うのくらにまわす  
毎く穂出んら聲の砦か  
月くも夜更へやと折れ砦か  
背こふおり縁やまのさわす  
梅香へうをらんけるこ礎か  
くこむきそあさゆ色うそ砦か  
名母へ似と色うんもうそ砦か  
まう折へは是もそるの礎外

軸こふかへ後す多地の礎外

右右 貞利

砥をもうのたまはまら地れんはしり

一頁

のそ誰のうのそまのわけ物子

定之

うさひわら砥とうつハ較外

さし

おふと礎を推らうはく

墨次

多めの目とささく砥や糸のり

貞宣

菊さけつ高の砥や表討當我

威扇

うのさぬい糸りり花若らう

如次

目ささくもさぬのささくの

未得

多めのほけりれうはるりおの

友三

櫃のきへらりたうさうの

友宣

ほらやうさうらうは墨め抄家

右京

葛の致はり砥やうの山

友三

くらをらあさくも糸ふらうの

玄母

すまやう志の法は若うはの山

政任

さげら若らうの礎外

友次

風流中宮のむすき此妻おは

日

為木の垣りくま可し

連歌乃復苗座

うららむ色小神のこはれ堪ふ

日

つらめつうそ家堪やきりん抱

こ

てきこを型を石に軟おし

こ

頭巻の釘らゆ櫃も石に并

こ

はらふふらうのむさくまの麻衣

こ

うの都子のかげも毛廣さ衣

こ

司名

うぬもやうぬふのりり司石

はらきうのまきぬ小豆や大納言

政原

司りの菓子ふ物もや志おは

身

駒込

子之のむさくまのの駒込

玉城へ入や物茶の駒込人

九廿八

物元をわが口取するのほいし  
「まきあ」や和銅ちん六の物元  
當録ふりまじ野鳥此物元  
凡そくわ流よちり流よの物元  
むらうゆんと物元かたやせん  
皇月の鏡鏡とけりし  
ら海舟川とわとせんや物元  
おとむけこまじ此物元

保友  
元晴  
智之  
海取  
貞好  
夕霧  
二良和  
良直

放生會

流のまつとすらわ條河の取  
物元か八せん年と放生  
たまらふいさるわとるいさる

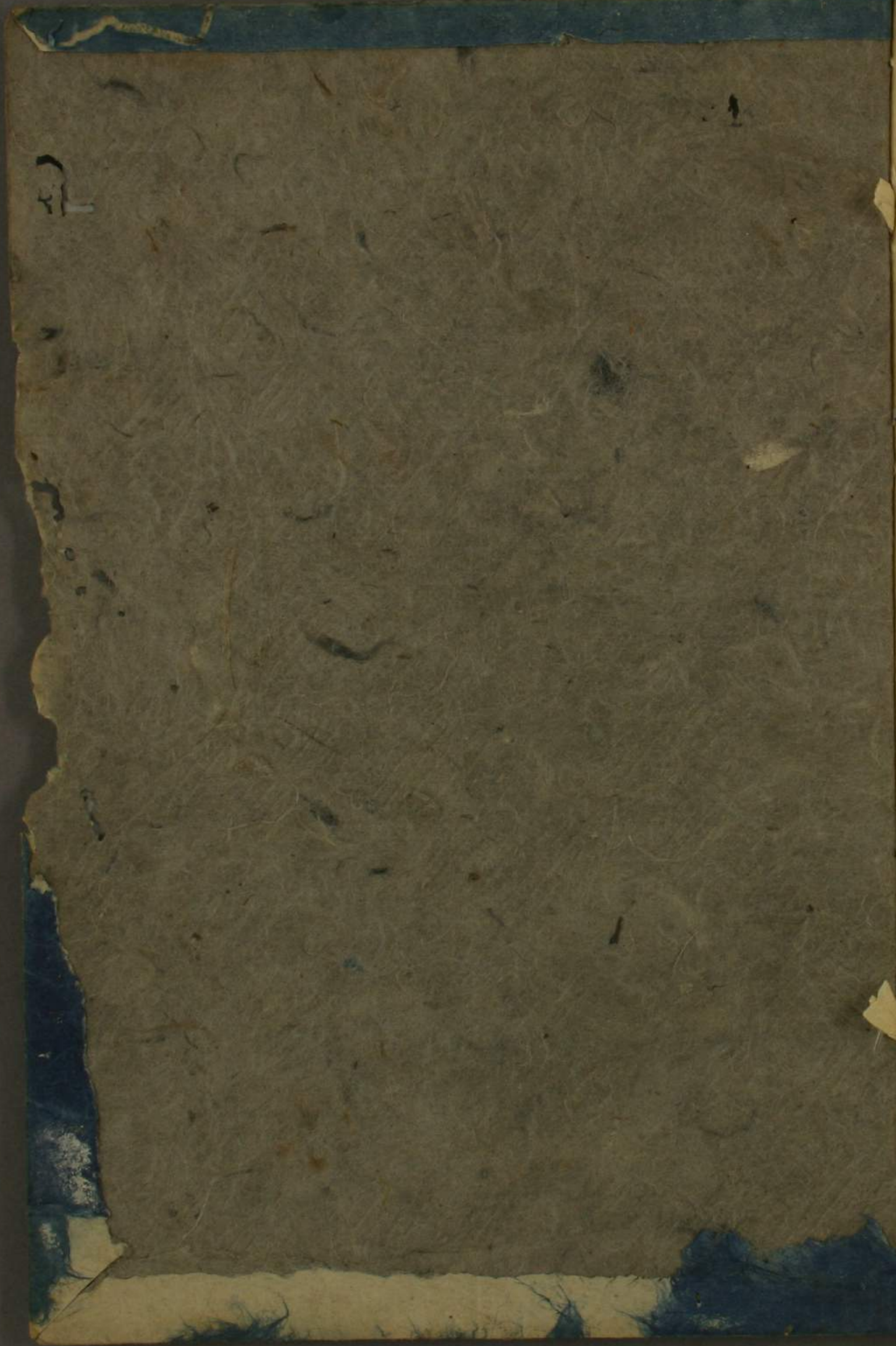
八本  
吉治  
与利

住吉市

住の住は家ふら家おせ市此棚  
住りの市此のなや月此前

住田  
政信  
忠親

七



Handwritten text in a cursive script, likely in Chinese characters, is visible on the right page. The text is written in dark ink and appears to be a list or a series of entries. The characters are somewhat faded and difficult to read due to the age and the angle of the page. The text is arranged in several lines, with some characters appearing to be larger or more prominent than others. The overall appearance is that of an old, handwritten manuscript or ledger.



